



連載

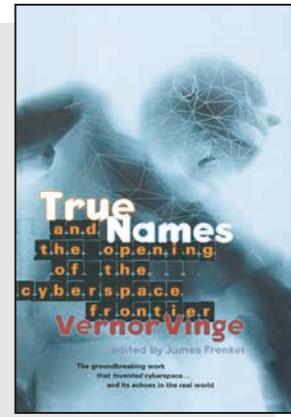
ビブリオ・トーク  
—私のオズメー—

… 福地健太郎 (明治大学総合数理学部)

## True Names : and the Opening of the Cyberspace Frontier

Vernor Vinge 著

Tor Books (2001), 384 p., ISBN : 978-0312862077



### 1981年の「予言」

Vernor Vinge の短編 SF 小説 “True Names” (Dell Publishing, 1981) (邦題『マイクロチップの魔術師』新潮文庫, 1989) は、コンピュータネットワークの理解が広く一般に浸透する以前の 1981 年に発表された。全地球を覆うコンピュータネットワークにあらゆるものが接続された世界が舞台で、政府による監視とそれをかいくぐるための暗号通信、バーチャルリアリティ空間を介したオンラインコミュニケーションやネットワーク上で繰り広げられるサイバー戦争などを予見し、さらには人間の手を離れて自己成長した人工知能まで現れ、『ニューロマンサー』や『攻殻機動隊』といった作品の登場を準備した画期的な作品である。

本作の登場人物の多くはいわゆる「ハッカー Hacker」であり、ネットワークを通じて現実世界のさまざまな事象へ違法に干渉する技能を持っている。ネットワーク上では彼らは仮想の身体をまとい、偽名を名乗って活動している。本人の現実世界での名前 (“true name”) を知られることは生殺与奪権を握られるも同然という設定が施されており、主人公スリッパリーが政府の機関に真の名を知られてしまったところから物語は始まる。

スリッパリーは、ネットワークで暗躍する通称「郵便屋」の正体とその目的を探ることを強られるが、やがて郵便屋との全面的な抗争が勃発。現実の全世界をも巻き込む戦闘にまで発展し、地上は大混乱に陥る。戦闘の果てに辿り着いた郵便屋の、そしてずっと行動をともにしていた協力者の正体は……。

主プロットの複雑さもさることながら、随所に登

場する道具立ても凝っている。主人公たちが接続する仮想空間はファンタジーゲーム風の見た目が施されているが、これらはコンピュータグラフィクスによって逐一描かれているのではなく、いまの言葉でいう Brain Machine Interface を通じて、人間の脳に直接働きかけて描いているため、通信量を大幅に削減していると設定されている。また、自然言語で記述された法律を代替するものとして機械可読なプログラムによる政策の立案・施行の自動化が作中世界では実現されており、さらにこれに対するハッキングによる実社会へのハッカーからの干渉も起きていることが示唆されている。

作者は本作の構想を、テキストベースのチャットを通じて得たと述懐している。あるとき勤務先の大学ネットワークへ匿名アカウントでログインしていた際に見知らぬ人物からチャット (TALK コマンド) で話しかけられ、互いに相手の正体を探ろうとしたものの最後まで分からなかったという。そこからは作者の想像力のみで、これほどの予言が成し遂げられた。ちなみに本作の巻末には Marvin Minsky による解説があるが、これがヒューマン・コンピュータ・インタラクションについての重厚な論考となっており、コンピュータを取り巻く当時の状況を知る上で貴重な資料となっている。

しかしながら、本書評で本当に紹介したいのは、“True Names” そのものではなく、2001 年に出版された 20 周年記念版の方である。

## 2001年の「返答」

同書の20周年記念版“True Names : and the Opening of the Cyberspace Frontier” (Tor Books, 2001) は、James Frenkel によって編まれたもので、前述の小説に加えて、関連するさまざまな論考をあわせて収録したものである。論考の著者には Timothy C. May・Bruce Schneier・Pattie Maes・Richard Stallman・Mark Pesce など、情報セキュリティ・エージェント技術・VRなどに精通した錚々たる顔ぶれが並んでいる。

20年という時間がコンピュータをどれほど発達させ、そして現実の問題をどれほど招来したかがこれらの論考には記されている。体制によるネットワークの監視とそれへの草の根的な対抗は、20年前にはフィクションの領域であったが、いまやそれは現在進行形の問題として社会基盤に組み込まれた。仮想空間はいよいよ我々の生活に根を下ろしつつある。人工知能技術は陰に陽に、社会の大きな変革を迫りつつある。

それらすべてが“True Names”の影響下にあるわけではもちろんないのだが、しかし一方で多くの技術者・研究者が本作の影響を認めている。本作で描かれた仮想空間のアイデアを共通言語として初期VRは構想され、本作が示した危険を回避するために暗号技術は拡散浸透した。SF (Science Fiction) は確かに、社会に影響を与え得るのである。

残念ながら20周年記念版の方はまだ邦訳が出ていない。国内出版社の英断を期待したい。

## 2014年の「蜂起」

本作にまつわる出来事としてもう一点、2014年に出版された、20周年記念版の電子書籍版について言及しておきたい。

同書の電子版からは、Richard Stallman による論考“The Right to Read” (「読む権利」) が同氏からの申し出で取り下げられており、代わりにその理由を示した文章が収録されている。それによると、電子書籍版ではその利用の自由が著しく制約されていることに対する抗議として論考が取り下げられたことが分かる。

同論考はSF短編仕立てになっている。21世紀後半、人類社会では「中央ライセンス管理局」により読書の自由が制約されており、誰がどの本を読んだかが追跡され、また本を共有したり貸し借りすることが制限されているという設定になっている。最後に人々が読書の自由を求めて、月植民地での蜂起が始まるまでが歴史書の体裁で書かれている。

Stallman が電子書籍版への同論考の収録を断わったのも、当然であろう。

あらためて、フィクションというものは常に現実と隣り合わせであることに感じ入る。

※なお、取り下げられた論考は下記から読むことができる。

<https://www.gnu.org/philosophy/right-to-read.en.html>

(2019年3月16日受付)

福地健太郎 (正会員) kentaro@fukuchi.org

2004年東京工業大学大学院情報理工学専攻博士後期課程単位取得退学。博士(理学)。ユーザインタフェースや知覚心理学、エンタテインメント応用に興味を持つ。